

幼稚園から小学校へのより良い接続に関する研究

所属校：渋谷区立富谷小学校
氏名：奥田奈緒子
派遣先：早稲田大学教職大学院

キーワード：小1プロブレム・幼小連携・段差・カリキュラム

I 研究の目的

昨今、小学校1年生の入学児童が学校生活になじめず、落ち着かない状況が続いている様子が取り上げられるようになってきた。河村(2008)①は「初めから集団のまとまりというものがなく、目的も意識もそれぞれバラバラな子どもたちが一カ所に群れ、一向にまとまらない状態」を「小1プロブレム」と位置づけ、「学級崩壊」と区別している。具体的には、教師の話听不懂、指示どおりに行動しない、授業中に勝手に教室の中を立ち歩くなど、学校生活への不適応状況が報告されている。平成21年に東京都教育委員会が実施した調査②によると、前年度に不適応状況が発生したと回答した校長が23.9%にも上り、実に4校に1校の割合で起きていることが明らかにされている。

同調査では、不適応の発生時期について57%の校長が年度当初の「4月」と回答しており、小学校教員の73.1%は不適応状況の発生要因として、「児童に耐性が身に付いていなかったこと」、65.5%は「児童に基本的な生活習慣が身に付いていなかったこと」と回答している。小林(2009)③は、「幼稚園の『保育』と小学校の『学習指導』の間にはシステムや教育環境のほか、教師の考え方と子どもへのかかわり方に様々な違いがある」と指摘している。これらのことから、幼稚園と小学校の教育における段差をなめらかにし、入学後の指導に活かす必要があると思われる。

そこで、本研究では以下の3点について考察することで、より良い幼小接続について探ることを目的とした。

- (1) 「小1プロブレム」が起きる原因となり得る小学校の指導は、どのようなものか。
- (2) 交流活動時における小学生の行動が、いかに幼稚園児の就学準備に影響するのか。
- (3) 小学校入学後の指導において、どのような指導をすれば良いのか。

II 研究の方法

1 実施期間

平成21年6月3日～11月25日 週1回

2 研究の対象

- (1) 公立幼稚園 年長組
- (2) 公立小学校 第1学年(単学級)

研究対象校のある自治体では、小学校に幼稚園が併設されており、多くの幼稚園が小学校と同じ建物の中に設置されている。また、小学校では落ち着いた学習活動が行われ、「小1プロブレム」と思われる状況は見られなかった。

3 調査研究

研究対象校の幼稚園および小学校において、それぞれの教員、園児や児童を対象に、次の調査を行った。

- (1) 行動観察による調査
- (2) 聞き取り調査
- (3) 授業参観、連携活動参観及び支援

III 研究の結果

1 小学校に対する憧れと現状

(1) 幼稚園児

全員が小学校での生活に意欲的な態度を見せていた。教室の目の前に給食室がありながら、お弁当を毎日食べているため、「給食が楽しみ」と答える園児が多かった。さらに、小学生を見て「ランドセルで通える」など、物に対する憧れが強かった。しかし、生活リズムや学校での決まりについて意識している園児はほとんど見られなかった。年長組が6名しかおらず、少人数の学級であるため、小学校就学時、たくさんの児童とかかわれるかと心配する幼稚園教員の意見もあった。

(2) 小学校児童

入学から半年を経過した10月に、幼稚園との違いを聞いてみたところ、「お弁当は好きな食べ物しか入っていなかったのに、給食は嫌いな食べ物が出るから嫌だ」「好きな時に好きなことができない」と、入学以前には見えていなかった幼稚園との違いが分かり、幼稚園の良さを振り返る様子が見られた。また、「友達と一緒にすることが増えた」「友達と遊ぶのは楽しい」という、他者とかわりをもつことの良さを感じている様子も見られた。

2 幼稚園と小学校における指導の特色

(1) 幼稚園の指導

教員一人当たりに対する子どもの人数が少なく、子どもと密接にかかわりながら活動を行っていた。幼稚園教員は個々の子どもの自主性を汲み取りながらできるだけ少ない口数で見守り、子どもが活動に集中できるような指導をしていた。また、子どもの興味や関心に応じて活動が十分にできるよう、柔軟に活動時間を調整し、時間に余裕をもたせていた。

就学における段差については、乗り越えることで子どもに大きな成長が期待できることから、「意義ある段差」は必要であるという幼稚園教員の意見もあった。

(2) 小学校の指導

学級全体に指示を出すことが多いため、教師の言葉を自分への指示ととらえず、聞き逃してしまう様子が見られた。また、指導する児童の人数が増えるため、教師と児童の間の距離が広がり、より友達との関係性が重要になっている。

幼稚園に比べて、教科指導を中心とした学習活動であるため、教師は理解を促す支援を重視していた。またチャイムや時計を意識し、常に時間を気にする様子が見られた。

3 交流活動の状況

給食体験交流では、幼稚園児は小学生の給食準備や食事の様子をじっと観察しながら、そのまま行動をまねしていた。小学生が箸で食べる様子を見て、普段、箸を使い慣れていない幼稚園児も、すすんで箸を使って食事をしていた。

また、小学生が幼稚園児に対して読み聞かせを行う交流では、小学生が文字を読む様子を幼稚園児が尊敬のまなざしで見守り、学習に対する関心を高めている様子が見られた。

いずれの活動も、小学生が中心に行っていたことから、全体への指示は、小学校の教員が行っていた。

IV 考察

1 就学準備としての交流活動

交流活動では幼稚園児が小学生の行動を見て自分の生活経験を広げようとする姿勢が見られたことから、交流活動における小学生の行動は、幼稚園児にとって大きな影響をもたらすと思われる。特に、小学生が集団で協力しながら活動に取り組む姿を見るという経験は、幼稚園児が就学後には集団行動の機会が増えるということを意識するために、有意義であると考えられる。また、小学校教員が交流活動の全体指導を行っていた

ことは、幼稚園児が就学後、一斉授業が行われることの意識付けとなる。ただし、食事マナーや言葉遣いなど小学生の良くない面も幼稚園児がまねしてしまう弊害もあり得るので、事前指導が必要である。

2 小学校における支援策

幼稚園から小学校へ指導の接続を行うに当たり、小学校では、早い段階から友達づくりを意識した指導を行うことが必要であると思われる。友達との関係性を深めることで、精神的な安定や集団意識をもつことが期待できる。近い距離の子ども同士で継続的なペアワークを取り入れた学習活動を行う、教師が集団遊びのモデルを示すなどの支援を行い、友達とかかわる楽しさを感じさせるようにすることが考えられる。友達とかかわる中で、失敗したり衝突したりする場面もあるが、その中から我慢することや思いやりなど、多くのことを学んでいくのである。研究を実施した小学校では、学級担任が友達と遊ぶ時の誘い方や言葉がけを具体的に教え、それを実践する児童の姿が見られた。

教科指導では、児童の低い耐性に対応できるように、モジュール制による授業を実施し、柔軟に時間が使えるようにする手立てが考えられる。段階的に固定時間に移行していくなどの工夫ができるであろう。

さらに、学校全体の取り組みとして、PTAと協力しながら、全校児童が「早寝・早起き・朝ご飯」運動を実施しており、児童が基本的な生活習慣を身に付けられるように努めていたことが注目される。

3 系統立てたカリキュラム作り

交流活動では、小学校での指導事項を前倒しに指導するのではなく、幼稚園と小学校が支援方法を意識したカリキュラムを作成し、お互いの指導事項を明確にすることが必要と考える。その結果、より良い連携の流れを作ることができ「小1プロブレム」と呼ばれるような子どもの混乱も避けることができるであろう。

研究対象校のある自治体では、就学児童とその保護者に対して、友達づくりを目的とした就学前プログラムを実施しており、入学直後から友達と積極的に関わろうとする様子が見られ、落ち着いて学習活動に取り組むなど大きな効果を上げている。今後は、このような取り組みを生かした指導について研究を継続する考えである。

【引用・参考文献】

- (1) 河村茂雄(2008)『Q-U 学級づくり 小学校低学年』図書文化,p.32
- (2) 東京都教育委員会 (2009)『東京都公立小・中学校における第1学年の児童・生徒の学校生活への適応状況にかかわる実態調査について』「公立小学校第1学年の児童の実態調査」
- (3) 小林宏己(2009)『小1プロブレムを克服する！幼小連携活動プラン』明治図書,p.8